

金毘羅參詣名所圖會 二

ル 4
3525
2



門 儿 4
號 3525
巻 2

田 部 氏 印

金毘羅參詣名所圖會卷之二

目録

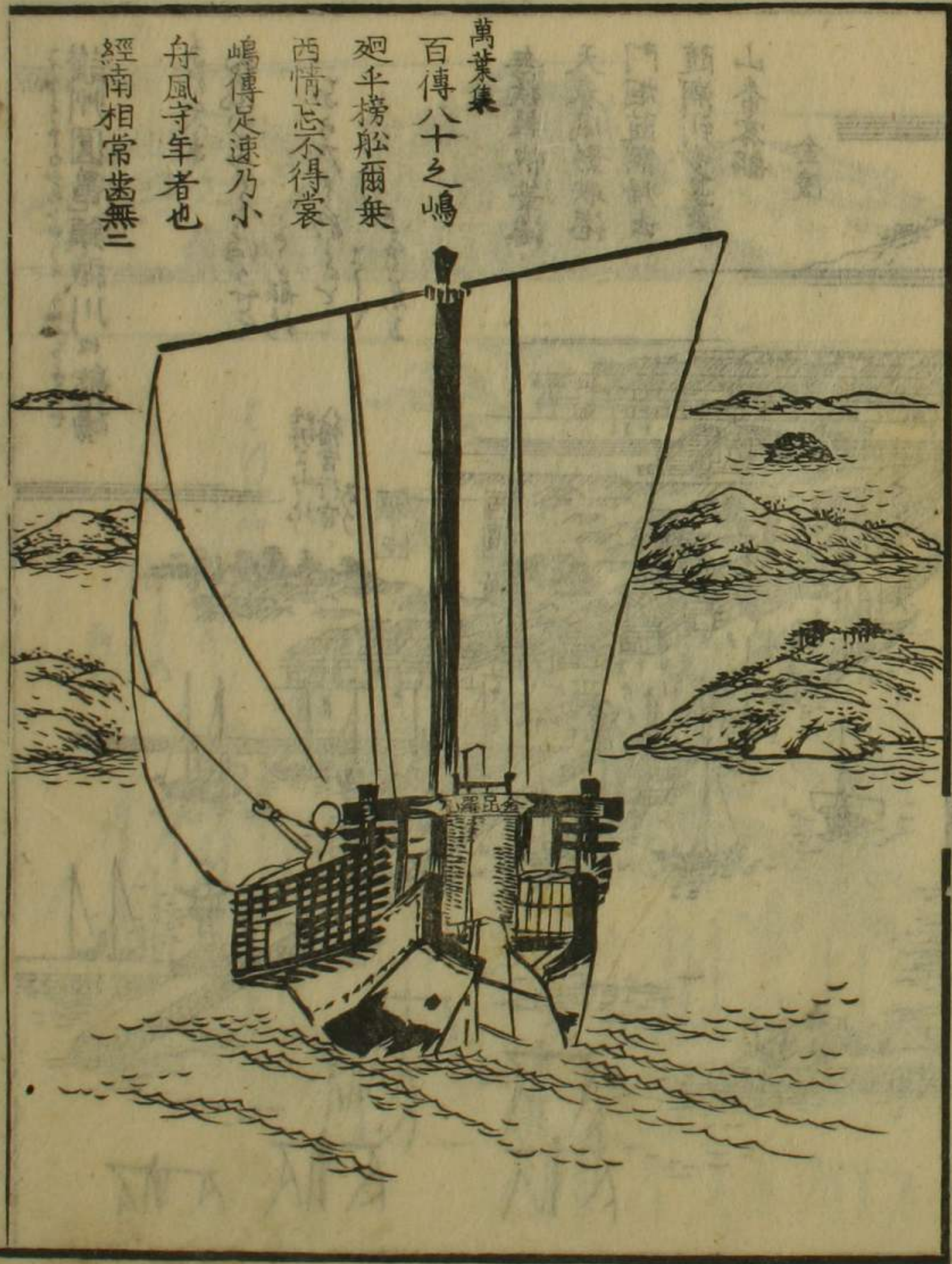
金毘羅船渡海の圖	圓電鎮城川口	大亀海上浮む話	井上通女の傳
通女盤挂小対話の圖	中府口ニ軒家	金毘羅伊豫の分道	山北八幡宮
田村の池	柞魚の神社	西行二本松	郡家八幡宮
神野の神社	武智カ次郎の墓	与北の茶堂	公文の茶堂
富熊の神社	櫛梨の神社	大歳神社	石井の神社
横瀬領分の境	櫻の馬場	紫銅鳥居	靈驗石
松櫻の大樹	榎井 新町	一之鳥居	鞘橋
石淵	萬農の池	萬農地の神社	十市の池
打越坂	内町旅駕屋	一之坂	名産館店

嘉十六年一月十一日寄
尼野貴美氏贈

愛宕町	天神社	愛宕山	箸洗の池
清少納言之墳	同石碑	清女夢中一意趣と告る圖	
普門院	二王門	櫻の馬場	真光院
萬福院	尊勝院	神護院	竹園
別業幽軒	本坊金光院	神馬堂	茶堂
愛宕山遙拜所	多寶塔	萬燈堂	大罽口
古帳菴の碑	二天門 鐘樓	本地堂	行者堂
大行司堂	紫銅鳥居	御本社	拜殿
二十番神社	社頭より眺望の圖	經藏	紫銅之碑
觀音堂	後堂金剛坊	繪馬堂	阿彌陀堂
孔雀明王堂	籠所	觀音坂	蓮池

金二ノ目ノ

金堂	例祭神支行列の圖	興泉寺	諸道行程
大麻の神社	古作兩命の圖	五岳山善通寺	金堂
五重大塔	鐘樓 鼓樓	常行堂	觀喜天祠
五社明神社	天神社	經藏	善女龍王社
南大門	法然上人の塔	足利尊氏郷の塔	楠大樹
觀智院觀音堂	花成坊	院王坊藥師堂	典院御影堂
親鸞堂	十王堂	茶堂 鐘樓	二王門
護摩堂	御成門	本坊	邀月亭
道範阿闍梨の塔	佐伯八幡宮	使鬼神額と忍も圖	獨鈷水
御手洗の水	香色山	四方護荒神祠	六地藏
大上山	中山	御影の池	我拜師山



萬葉集
 百傳八十之嶋
 廻半榜船爾衆
 西情忘不得哀
 嶋傳足速乃小
 舟風守年者也
 經南相常齒無二

金二ノ目三

金毘羅奉詣名所圖會卷之二

圓龜湊

讃岐国北の海濱あり大坂より海陸とも行程凡五十余里下津井より五里
 當津ハ幾内條より南海道往返の喉也此處泉頭山の奉詣大師靈場也
 遍路其奈南海小刻る乃旅客棧測浪津より乗船の途言も更なる陸
 路下向の軍も或田の下村より渡り又下津井より砥石何れも此方より岸
 せし言事はされ東雲の頃より追浪花より此船向い路りの若船引
 もきび黄昏時より向い路の渡海登船の出帆有船直賑ひ昼夜分は
 濱辺の藏々小俵物の水揚産物積送の途出仲は掛声船子の呼声響く湊
 には縦横小石の波戸ありて紫銅の大燈籠夜陰と照し監船所の歳重濱々の石
 燈籠魚市の群集御城正面は山岳魏々として敬馬悟く内町より市野軒
 とも交易小舟もなり就中籠の細物法團圓座ふんごる物之と齧

金二ノ二

家多々旅客かゝるに需めて家土産とするもの街の蟹蟹米實亦當國第一乃湊
 と言ふ也 城下の封境寺院神社の類は後編に著せざるに洩れ

因田耕筆守興和尚が結云

備前の下津赤う船して丸亀へ渡る海上の龜道よりしてそらむひく又人斗り
 みるまは淺標もあも深くもあもといふ長は水どうちこそと勢もあもさうり
 丁也一懐くく船取こそあれ一船取んてあまの舟の出へる舟の首と出へる舟の
 空長舟の海長困るる日かか首と出へる舟の首と出へる舟の首と出へる舟の首と
 龜とてて人なるハ廿也といふ舟の首と出へる舟の首と出へる舟の首と出へる舟の首と
 舟の首と出へる舟の首と出へる舟の首と出へる舟の首と出へる舟の首と

井上通女

丸亀の藩中井上何某の良女元録中の人あり

傳云通女ハ讃岐國圓龜言極度の家臣井上儀左衛門某の女なり生質
 細雅も慧敏も書讀も待も賦も兼て和歌も通ト雅才と以て世に聞ゆ
 上女子の才傑あつて而して貞正通女の如き者罕に観る所なり十六歲時

五雲散人
通女の紀ゆ
漢もる詞

唐山之孺子
善唐詩皇味
之州女善和歌蓋
國風之行使然也
不足為奇者也
世處女巧歌兼得
詩法者其惟通子
歟



井上通女

通女系極彦の藩井上何某の
處女として幼くして書し詩
歎も一成人の情をもたせり
十一歳の時君に依て武藏
く世道の紀と東海紀行と名
つて天和二年に刊せし
文筆の妙なりしを鑑
掛神脚の佛に福哉
れ一歎と録せり
象の虎い



其君の母との不離ひ車式不到つて侍_ひ此時の道の紀と東海紀行と号く
 其後の年と経て國小政の時の紀行と飯家日記と以後田原在清内
 つし小娘傳傳傳門義勝とうむ是候の侍候の儒はとあり又論義子
 初と著は通女著は所_り前云二紀行の外其家の集と和歌往事集と
 名く其氣象の秀ると言ふ盤挂禪師_ト儒佛と論とて被_り録るといふ
 事_ト中道_トの_ト世と_トの_トは_トは_トなる船もこの事あり

東海紀行

上界十六日のとぐる以船よりね風とびく_と舟傳_ト

あざせよ_ト海_トを_トり_トけて_ト舟_トの_トん_トれ_トぬ_トを_トけ_トん_ト風

いざよひの舟伝_トう_トつ_トて_ト玉_トの_トく_トく_トみ_トえ_トる_ト風_トを_トり_トて

凡_トふ_トい_ト月_トを_トり_トる_ト玉_トも_トく_トり_トて_ト流_トの_トろ_トも_トり_トる

中畧_トと_トれ_トぬ_ト流_トの_トろ_トも_トり_トる_トく_トり_トれ_トよ_トく

中府口
中府村
三軒家

乘_ト寒_ト一_ト葉_ト浮_ト 倏_ト忽_ト過_ト他_ト州_ト 風_ト響_ト驚_ト郷_ト夢_ト

波_ト聲_ト動_ト旅_ト愁_ト 蒼_ト々_ト天_ト與_ト水_ト 浩_ト々_ト月_ト如_ト流_ト

拈_ト袖_ト蓬_ト窓_ト裡_ト 不_ト能_ト只_ト自_ト羞_ト

城_ト下_トの_ト門_ト外_トと_ト市_ト中_ト候_トに_ト在_ト領_ト之_ト左_ト右_ト人_ト家_ト建_ト列_トて_ト農_ト工_ト高_トく_トも_ト小_ト候_トに

中_ト府_ト村_トの中_トより_ト昔_ト僅_ト二_ト軒_トの_トあり_トが_ト繁_ト業_トを_ト付_ト入_トり_ト今_ト亦_ト軒_トを_ト並_トり_ト故_トを_トり_ト回

名_トを_トり_ト此_ト所_トより_ト道_トす_トた_ト右_ト左_トを_トり_トま_トる_トた_トは_ト伊_ト保_ト街_トを_トり_トて_ト右_ト左_トを_トり_トお_トり

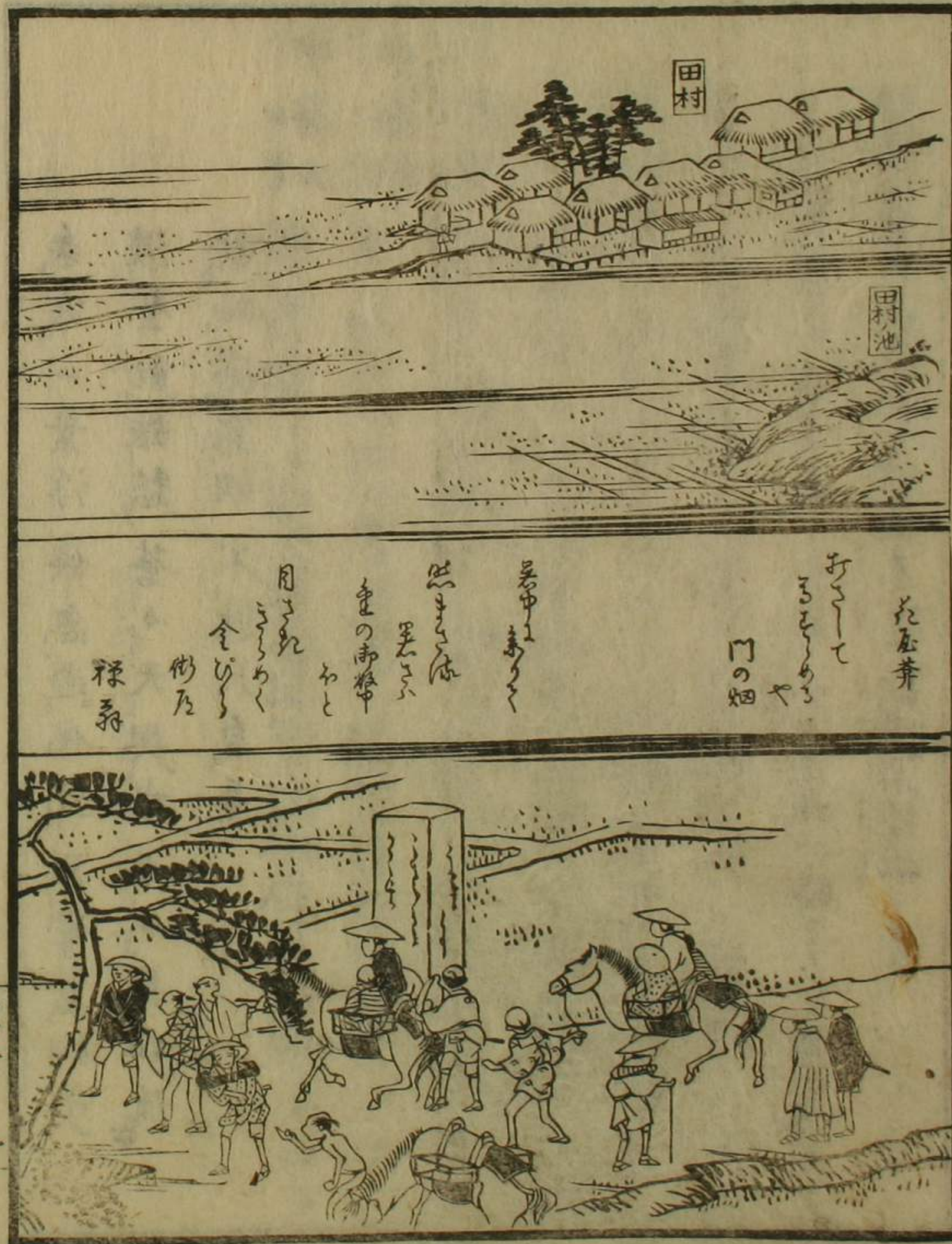
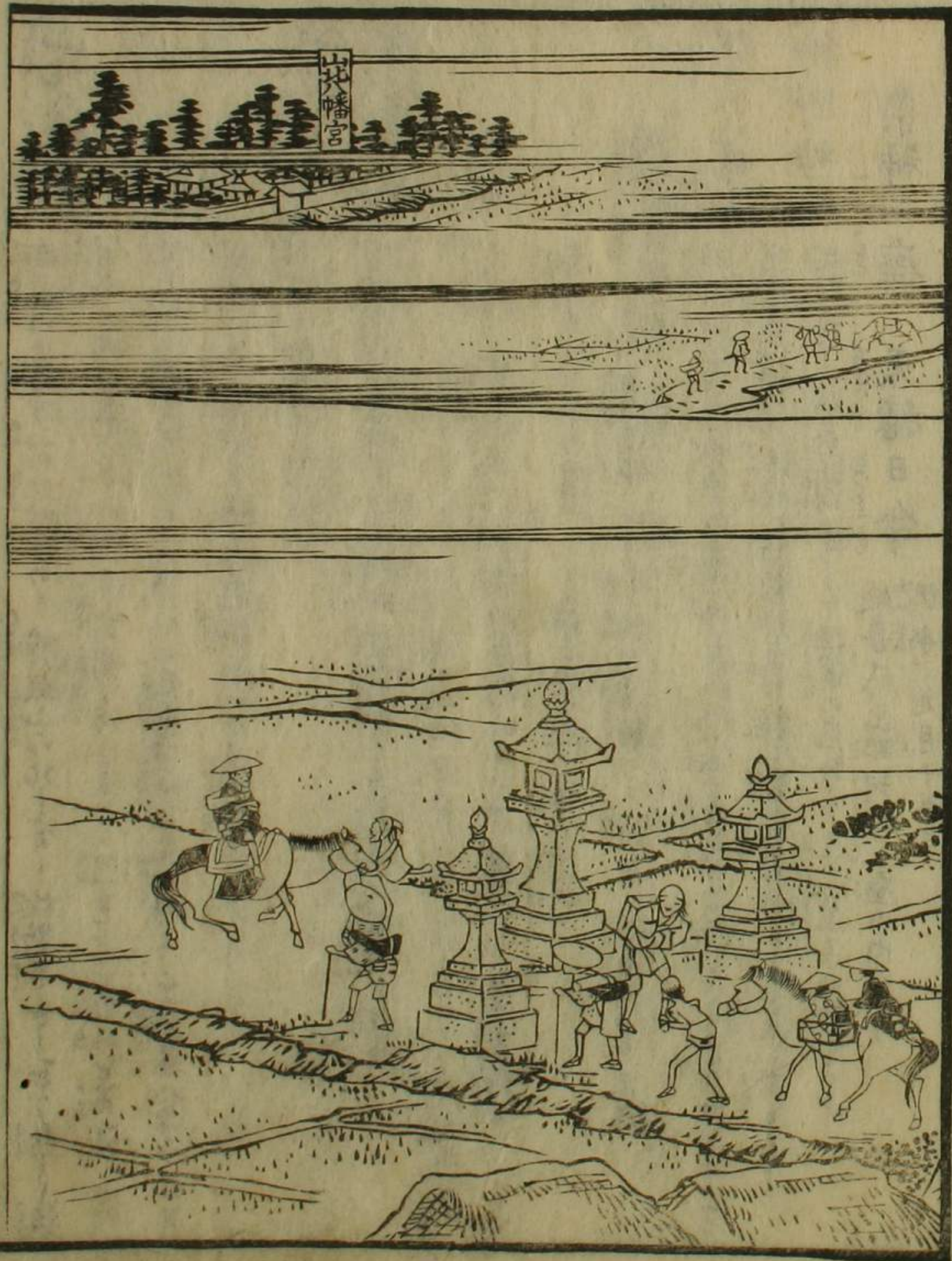
者_ト是_トに_ト送_トく_トた_ト金_ト毘_ト羅_ト系_ト詣_トの_ト往_ト還_トと_トて_ト道_ト標_トの_ト石_ト奉_ト納_トは_ト石_ト燈_ト籠_トなる_ト言_ト也

象頭山系詣の道條中府より百五十四間八都て官道とむとて路徑廣く

高低なく老幼婦女も能く此平地より其上傍の在郷より農夫何れも馬を引

いで系詣の旅客と進めて乗しむ事二分荒神の擗りて馬士唄と

ひ連て勇り形勢恰も伊勢系宮の街道不彷彿なり



花を弄
 打つて
 ころころ
 門の畑
 や
 若中
 あり
 然るに
 里
 主の雨傘
 わと
 用
 ころころ
 金
 物
 禄

金二ノ五

山北八幡宮

街道の左の方山の北村にあり始八幡山の北に有故斯号せり然も後世今の地お遷り今の地八幡山の南にあり然もとも何名も用ひて山北と称す地名も山の北村にあり九龍市中の生土神として例奉八月十五日福嶋の御碓所と神事渡御あつて最賑く

田村池

田村郷中往還の右あり

柞原神社

往還の左柞原村にあり村中の生土神と八高幢大明神と祓

祭神一座 神功皇后

里路傳て此神安産と守らせりすて隣村の婦人膝胎をれかきかき願をかくる不靈験新とあり

例祭 九月十八日 故一妻産の神と後

西行三本松

本社の後、向う今捨て其幹の跡まき故事ありや未詳

郡家八幡宮

郡家村にあり村中の生土神と八往還の右の方の社にあり九月十三日

神野神社

同村にあり八幡の正向あり往還の右あり土人皇子の社とあり

祭神一座 天穗日命

延喜式出郡珂郡二座の内なり 例祭 九月十五日

金二ノハ

武智万次郎云者墓

郡家村入口道の傍にあり

天保三壬辰年九月二十八日

夫人曰或圃の武士復讐のあり諸小と遍歴し未と宿意と果さるて終此里

痛死に故郷詳るるにのりも國守のれにせ給ひま埋て標と建せむすを

与北村

村中の中間小茶堂あり村より永代常根待りり金毘羅系詣の旅客

公文村

村中に茶堂ありて捨待の街道の右あり 松が端 公文村の小名あり

富熊神社

公文村の端の山にあり此所の生土神と八祭神一座 吉備武成命

櫛梨神社

西櫛梨村にあり延喜式出郡珂郡二座の内なり祭神一座 神櫛王

大歳神社

景行紀に云神櫛皇子は後後國造之始祖あり 東櫛梨村にあり此所の生土神と八祭神一座 飯津女命 往還の右方

石井神社

苗田村にあり此所の生土神と八祭神一座 應神天皇 往還の右方

横瀬村

村中に領も界の標石あり此所より金毘羅領あり

櫻馬場

左右櫻の並木ありて晩春の頃八爛熳して風景あり



拜殿や
落葉
鳩の糞
金生

八幡宮

社家

神野神社
郡家八幡宮

草庵集
柳系
後と
むらさき
つゝあはれ
さくらん
松阿



金二ノ七

郡家村

神野神社

紫銅鳥居

東武の信者より奉納して所より至つて度太くして具事なり。

靈驗石

鳥居の内右の傍より石面お教十字の銘文あり拾遺の邦に委くは

松櫻の大樹

鳥居の内右より象頭山八景の内より二本樹の春風ふと影せし此所

榎井村

おのり百五十丁の標あり

一の鳥居

石を依る西よりむいてへきより御本社まで十八丁

鞘橋

東西おから長サ凡十二間より幅凡二間余屋上瓦葺なり

橋より鮮魚青物類の店其余食用の品も小道具古手物おどの店ありておて
級より東結阿波街道より阿波町と号し橋を渡りて西より津街道を通
寺道より金山寺町といふすは兼路道より内町といふは後者を尋り

十二景之内 橋廊復道

人攀西嶽去 水向北溟流 風力權無運 始知不是舟

石 瀨

鞘橋の川上より例年九月八日川の御神更此所より行り

象頭山八景

二本樹春風 好景

ふさりやせの下の下風乃

長閑なり

いづその人の
と海をまよふれ

官道霜横輕燕飛

兩株族樹弄春暉

暗影影暖微風度

草微往還香客衣

雲帆



十二景之内 石淵新浴

林春常

石淵風浴新 知有詠歸人 能使箇心潔 臨流欲賽神

萬農之池 石淵の川上より弘仁帝御宇築く所ありて下流ハ十二景の内

十二景之内 萬農曲流

清波浮喬岑 長流早則霖 弘仁餘帝澤 一軟當千金

今昔物語

今ハむろ後岐国那珂郡ハ満農池トシテ大ナル池ナリ高野大師堂其国此人ト
言ハレト人ト云ルガ一池あり池のすまゝに遠く池に
高きうたれ池といふぞに海かゝる中に見えしうたれかゝる人の
かすらに見ゆるれはひやと一池築きて後くつまびとてくたれを其
国の人田をつくるに早魁の時とくも此池とてなそうけれバ国の人ト云ふ
合りうたれとすの川かゝるれ池の水都たてて後ふるむら
大小の鳥むむむあり國の肉の人これを取るすすすすすすすすすすす
まはく魚満てはくせさうりまはるに女國司任國あつるはり國中乃

金二ノ十

満農の池

象頭山八景 宿瑜

満農池遊鶴

千代とて

さくも

ちり

池は

汀あり

四橋の

こ冬

百里鏡光池水用
十峰黛色入波推
鶴群忽自雲間下
恰似傳書渡海来



金二ノ十

そしち其池のわたり今もあまのうらはたるとやま
 斯有ハ後世修補して復今の如く成りしものなり

満農池神社 池の傍より二代守備曰元慶五年十月十四日戊午授後任國萬
 農池神從五位下

十市池 又取吉布比 十市里 十市山 萬農の池の下流にあり

名寄 今も池と成ちの池乃みつりな公はもあつて人恋つ 為京
 内町 靴の西傍より坂の同いふ名を旅宿屋軒とて河まも家延喜承和坂の
 傍上庚申堂の石の向より橋の北に地蔵堂ありのま至つて郵局なり

十二景之内 五百長市

半千長市生 高下巧成隣 無意弄烟景 沽諸待價人

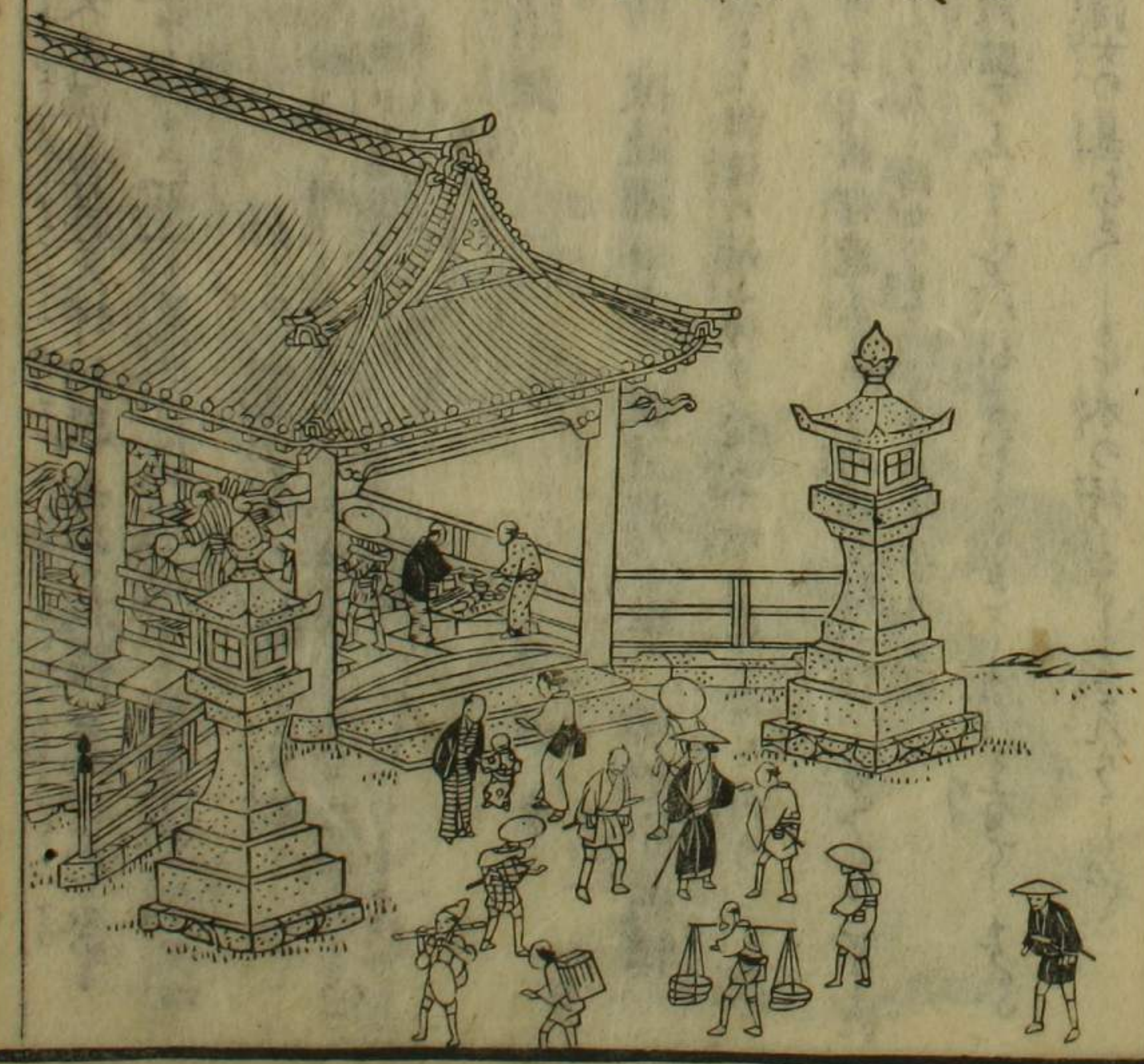
一之坂 大坂の同いふ名を旅宿屋軒とて河まも家延喜承和坂の
 傍上庚申堂の石の向より橋の北に地蔵堂ありのま至つて郵局なり

愛宕町 大坂のわたり新の町とてり此町より行くこと見ゆゆ
 斯ハあづけり

金二ノ十二

鞠橋 此地の地名を根尾といふ
 故に寺と根尾寺といひ又
 此所よりある人多く根尾
 出のり又お寺と根尾を
 おのる者多し籠まも昔
 より御神号と祈のゆゑに
 作るといふ一説は全毘羅と
 いひあつたせり

愛物の福より
 こやハ橋はがら
 つけくまあろ
 んせ乃橋ひ
 柱る丸



天神社
愛宕山
箸洗池

愛宕町の中央天満大自在天神相殿愛宕権現荒神小と祭る
正當あり
愛宕町より向うえゆる山山小愛宕山大権現の社あり金毘羅山の守護神
すくぬふらうて魔所なり
愛宕の山中小巨巖ありて是一ツの小池ありて此水つらるる早魘し
あし是十月御神更し供を著とあし御と捨と守護神捨いあつ
め此池にて洗ひ阿州箸洗寺の山谷小とびゆわといいつてあゆま著
りし池の地と号す

十二景之内 箸洗清漣

林春半

一飽有餘清 波漣源口亨 漱流頻下箸 喚起子荊情
清少納言之墳 一の坂の上散樓の傍小ゆり 近年墳の辺一碑を建り

傳云 往昔室永の年間散樓造立しつて此墳を他に移しかんとすに
遊こ辺り人の友清女の霊ありて日れて告りて歌
うつむた跡のふりてたれふやまきとるれと有てまふ
とて八雲の清女の墓ありて木の樹よこにたれらるとぞ

金二、十三

清少納言古墳

捨扇とおやせよ白浪園

長門小笠原

象頭山八景
清氏塚秋雨 佐院幾與

それあけ小簾の
古はらけふりかきと
妹乃むらさき

侍雪中宮彼一時
空留孤塚象山陸
昔日無人買馬骨
于今秋雨為君悲

梅隱



清少納言二條院の皇后お仕下し官女あり舎人親王の曾孫通雄始
 りて清原の姓と賜ふ通雄五世の孫清原元輔の女故清字と以て凡か納
 言の官名なり長徳長保年間著述せし書籍と枕草紙ともりて紫氏
 源氏物語と相並びて世に流行る老後に零落して凡かあり又元輔が
 住一家の跡お仕下し後四國一方向しちりごと

春曙抄云

去上法印百人一首抄云清少納言老後に四國の方に落れしおとほ
 愚素とて一條院の御代の初め小道隆公關白の御定子皇后の宮に立
 めし御威光もめでさうし清少納言もかの皇后の宮にありしつと
 らまて上臈の次とてやたらに甘きつみだりけれ内侍もあすべと沙
 汰ちどの夏草紙を見へりあるに中関白殿道隆かかれしおとほひて
 御足舟あがり御中よりさうさうし御堂殿關白の御して上東門院内にて
 中宮にたせのいふとて後より伊周公隆家郷おと遠流のこころり皇



清女が靈愛
 和歌を以て
 其意趣茂
 告る

之弓腹振起互此塚之由縁矣本末淺茅原木曲仁書誌且如此碑乎立鶴

丹奈母 天保十年餘五年三月 高松藩士 友安三冬撰

普門院 右塚のむらふあり則ち傍中あり

二五門 一の坂の上より金剛神の両尊と安ん象頭山の額が
竹内二品親王御筆あり

櫻馬場 二王門と合たる右塚の並木烈々吹春の頃には櫻樹として見視あり
十二景の内として右の標陣と名に此回石地龍杖多し鳥居あり

真光院 萬福院 尊勝院 神護院 標の並木のたよりくたの後の竹杖あり

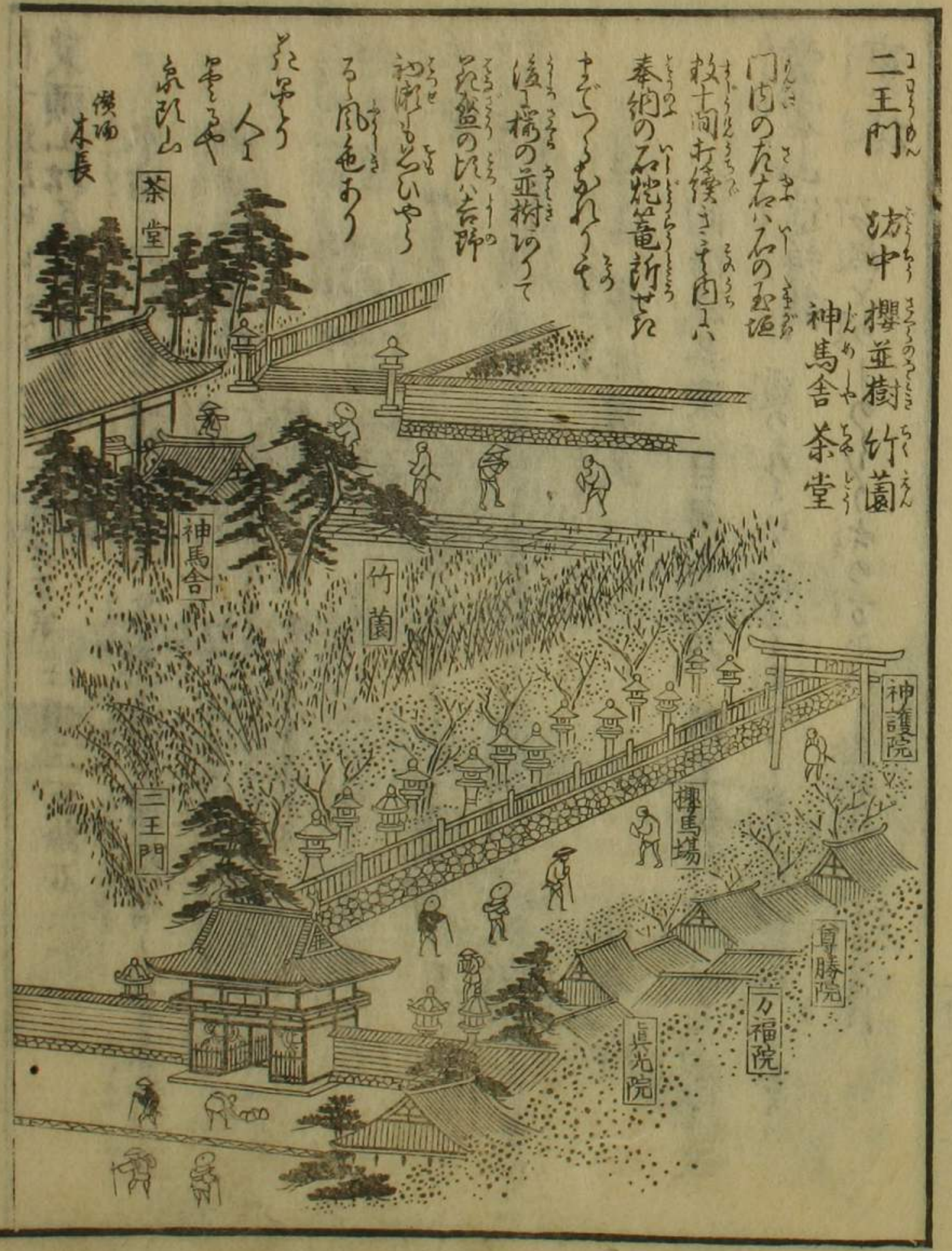
十二景の内 た右標陣 林才夫為

吳隊二姬笑 鄴宮千騎粧 花顔誇國色 列對護春王

月 後前竹園 全

稜得渭川畝 湘孫貽厥多 百千竿翠密 本末葉森羅

別業 坂とよてたの方より本坊の別荘なり景の内として坐軒梅月と題に



二王門 坊中 櫻並樹 竹園 神馬舎 茶堂

門内のたなは石のむね
杖十間おぼへさし内よ
奉納の石地龍杖多し
まてつとみれくも

後一橋の並樹ありて
石盤のいさし
初階もといや
る風色あり

茶堂 神馬舎 二王門 櫻馬場 真光院 萬福院 尊勝院 神護院

象頭山松尾寺金光院

古儀真言宗

社領二百餘石

本坊 御影堂

護摩堂

其餘院内ノ諸堂有之ノテ奉請ノ許

御守護贖所

方丈の大門と心圓ノ大玄關右の方には御所ノ御守護
と受る事ヲ護摩ノ修法ヲ教へ人ハ此所ニ於テ申入れ
修法ヲ行テ御護と下る事ナリ

神馬堂

本坊の向ふ左の側ニ御所ノ當國の大守源頼重御所建之る
神馬堂ニ御所の高井通の馬の御所

茶堂

神馬堂のうしろにあり常提待ニて茶室と想ハル

黒門表書院

石階と上りて右の方より本坊表にあり此門ニ池あり十二景の内

十二景之内 前池躍魚

林春舛

同隊泳其樂 自無香餌投 繞岩縱在所 活潑圍洋攸

愛宕山遥拜所

道のちよりの向ふ見ゆる愛宕橋梁の拜所あり

寶塔

石階とありのりり右の方より五智如来と安置

金二ノ十七

愛宕山

象頭山八景

春樹

愛宕峰吐月

こゝろ月吐

いむしきも
あつたけり張る
うけらるるも

愛宕山頭集宿鴉

隣着初月掛林斜

従今願學如恒影

更使詩思夜々加

象岳



萬燈堂

寶塔の辺小つり本尊大日如來と安ん常地明なり

大鰐口

萬燈堂の椽より徑凡四尺余厚廿二尺余重大く樹るに松竹あり其故と云
宝曆五乙亥年三月吉日 阿州木食義清ト記ル

古帳卷之碑

萬燈堂の前あり天保十四年癸卯春正月建る所なり

石表

の 是れと云ふや乃ちと云ふと云ふ
折れもよらるも文一と云ふ
江戸小細町 古帳卷

同裏

天竺川くまのりくともかきまも
あまやうかづり利益やをのぬ
古帳女

次、ゆえりの異々

龍眠書

十二景之内

群嶺松も

林英斎

尋常青蓋頤、項刻玉龍横、棲鶴失其色、滿山白髮生

全

幽軒松月

是ハ新小記ヤ一別業の事あり

二天門

起指霽光開 座看疎影回 高低同一色 知否有香來

天正年間長曾我部元親建立ありと云棟木に姓名を記ルと云

長曾我部宮内少輔元親ハ姓ハ秦氏トシテ信濃守國親の子ナリ甘城親
百濟國より渡りて入リて鎌足の大臣ハ道侍一信州におきて来地ト賜リ
に姓を秦トシておのりて小應永の頃十七代の後流秦の元勝土佐の國
江村郷に領主江村備後守是と養子トシ長岡の郡曾我部小城ト築けて入
則ク在名トシて氏を曾我部ト改めり然るも同國香美郡にも曾我部
り之府ありて領主も曾我部の何某ト云りて各郡名の頭字ト添へ長
曾我部香曾我部ト云りて元親生質剛毅勇力比倫ト絶ト名業ト
施ち干戈ト執テ到る所武名あり遂お土佐ト領ト南海ト天食ハ後志
去降泰トシ土佐一州ト賜ト數度の軍ありて天正十六年任友ト
四上土佐侍候泰元親ト稱ル

鐘樓

二天門の内左の側あり蓋玉足の國守生駒康の所寄あり
十二景の内雲林の景後ト記ル

十二景尚 雲林浩鐘

近似萬車轟遠如小磬鳴 風傳朝手晚 雲樹亦含聲

本地堂 樹樓一少一多石の鳥井あり是を下ま石橋あり是と懸て西

本尊 不動明王

石階 本社正面通西側石燈籠許あり

行者堂 石階中間右の方より役優婆塞神愛大菩薩と安置

大行司祠 當山の守護神也 毘沙門天摩利支天相殿の社あり

金銅鳥居 石階の中るにあり則本社の正面より

御本社 東向藤より九丁山の末腹より

金毘羅大権現 祭神未詳 或云三輪大明神又素盞鳥尊 又金山彦神云

舊事紀 伊弉冉尊神避之時悶熱憊憊因爲此化爲神名曰金山彦神

次金山姫神云

拜殿 下は通行の石あり橋人これと通りとて敷回拜は石の方石の玉垣の四角

左のありは石の番所あり用帳と頭人廿番所あり内津より金幣と出れ

十二景尚 裏谷遊廊

林麁稚子唱 山对五川眠 凹處足音少 吻々麁々連

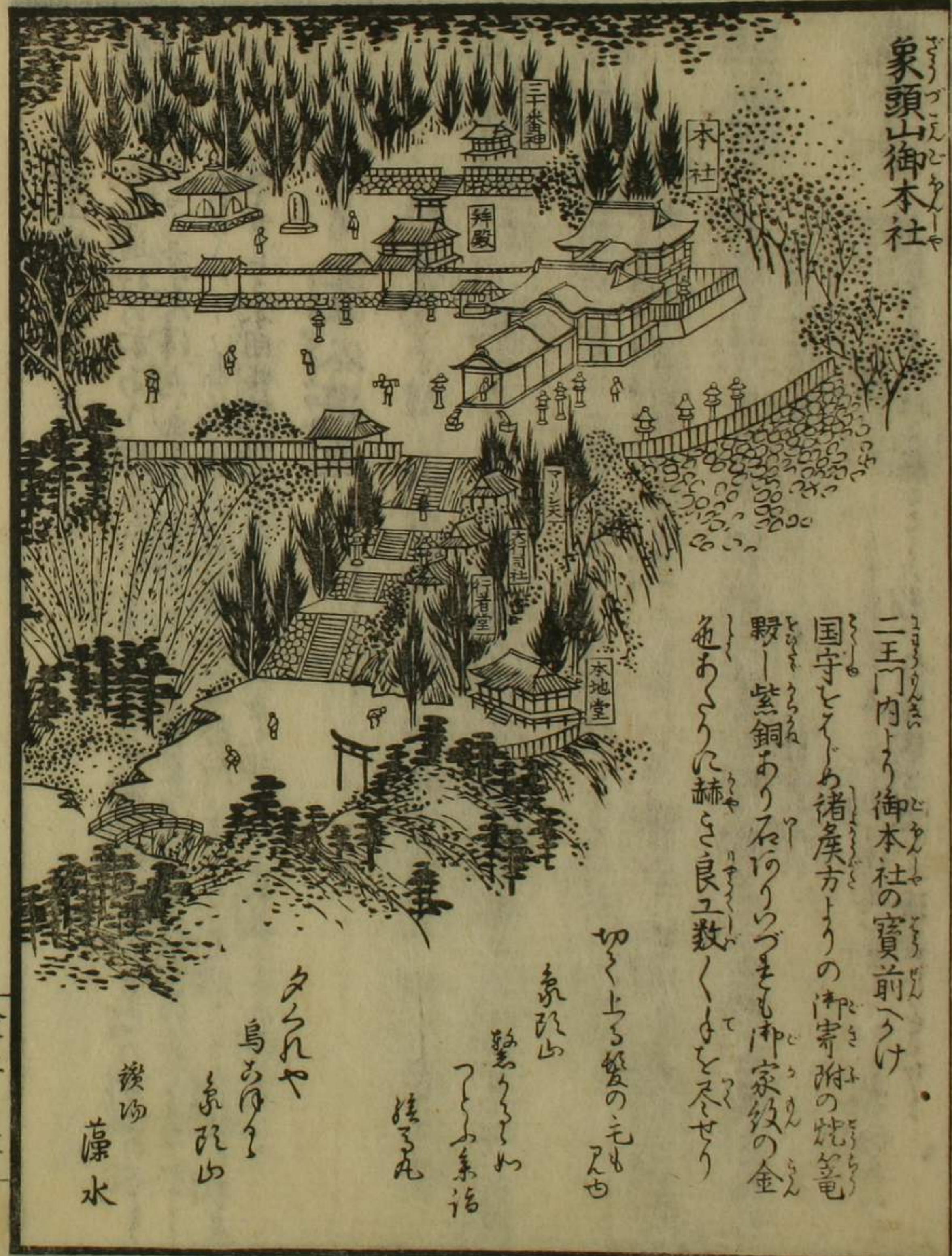
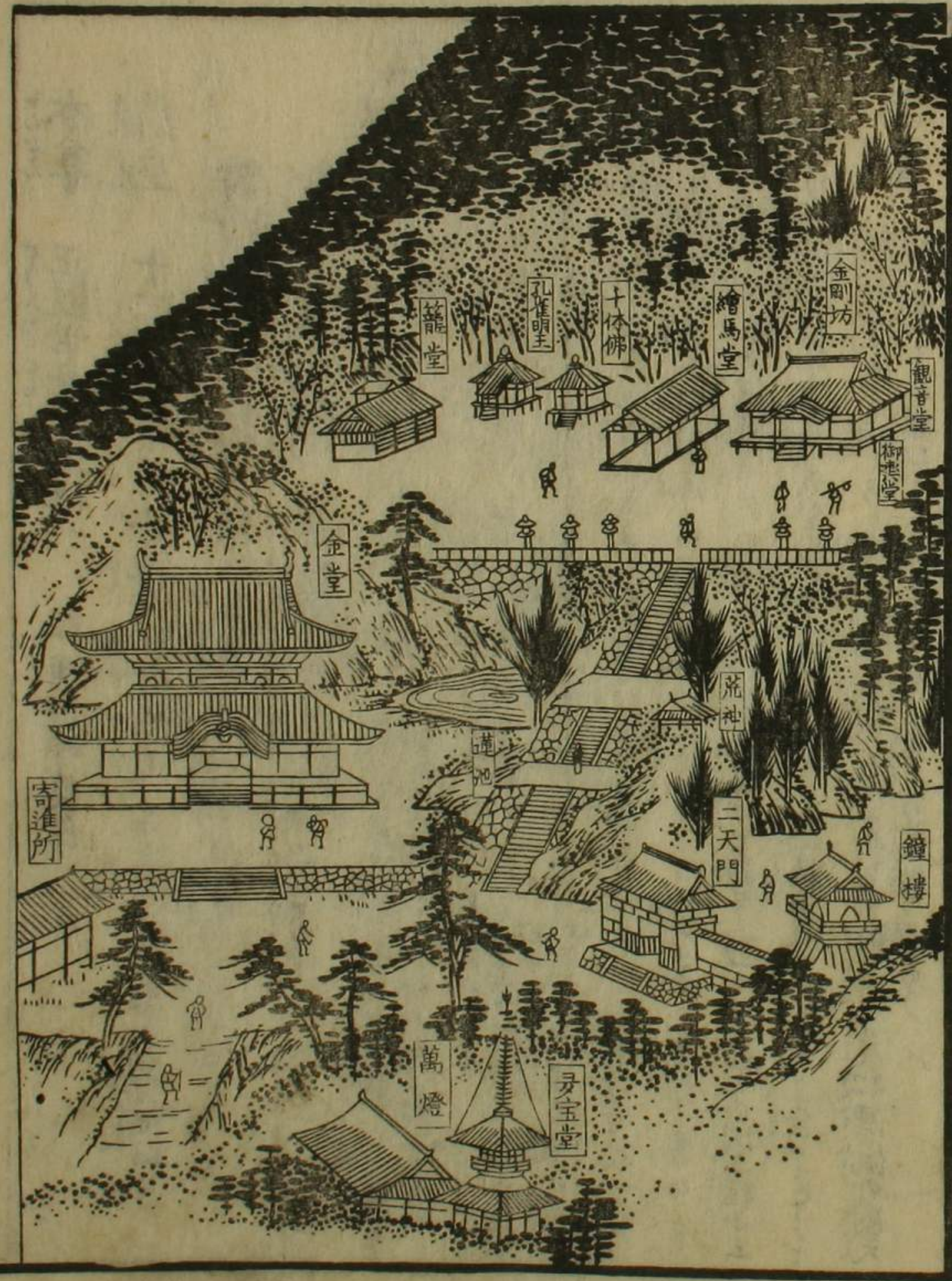
三十番神社 本社のたの方石階の上階の内より右に石あり此も本社の内階

経藏 右の拜殿に並ぶ 太守源頼重卿寄附して大明板の一切経あり

紫銅碑 釈迦文珠普賢十六羅漢十大弟子等博太子普成普建未と安置

紫銅碑 経藏の傍より上へ寶藏文覽之記と鐫以下小細文の銘を畧之

観音堂 寛文壬寅二月日記之より女一法を出不出



象頭山御本社

二王門内より御本社の寶前へくけ
 国守とくめ諸侯方よりの御寄附の焼籠
 駁一紫銅あり石のりつづも御家紋の金
 色あつらひ赫と良工数くもを尽せり

切くしる袋の毛 尺也

象頭山

勢きくくわ
 つくま治

桂丸

夕丸や

鳥のりく
 象頭山

淡ゆ

藻水

金二ノ丸



本尊

正觀世音菩薩

弘法大師真作

前立

十一面觀世音菩薩

古作也 左右三十三軀の尊像あり

狩野古法眼え信

馬の画奉額

堂内わの照格子の内あり

土佐守藤石光信

祇園會の岡奉額

同行並ぶ

後堂

金剛坊尊師の靈像と安ん

長二尺五寸許 兜巾縁繫と山伏の安んを備へしけし西を依りしを

繪馬堂

觀音堂南の殿あり 願成就の奉額と許多かる難風の舟船漂流の圖天狗の面などの類別して有り 傍に奉地紫繩の馬あり

金二ノ九一



拜殿の傍あり玉垣あり
辺北の方と眺望を
色海上の島浦郡
くすくすをこえす
林神像のありと
る飯の山と丸丸
橋足深八重五枚の
の鬼馬をてんて
りまをくすくすの
くろくろくろくろ
夕日されば流の上
つらつら浦
りねやらん

陸祐

阿弥陀堂

繪馬堂の傍あり千体佛と安置し 太守頼重郷の御建立なり

孔雀明王堂

阿弥陀堂に並ぶ佛母大孔雀明王と安置し

籠所

孔雀堂の傍あり系籠の請入る通夜に 神楽堂 観音堂の前あり

観音阪

石階あり 荒神社 坂の傍あり 蓮池 観音堂の南の方より御神夏

金堂

観音阪の下方あり境内中第一の結構莊嚴なり

本尊 薬師瑠璃光如来

智澄大師の御作

此所にて智澄大師七佛薬師の法を修し給ひしと云

例祭二月六月十月と三箇度あり推中十月に當山第一の會式なり

十一日御神事なり八月廿日より儀式始り毎奉頭人の者二人にて

前奉り是と決し九月八日沓川の神夏とて別當金光院に改入を召連れ

石園小松御修法に夫より頭人の祈所を造りて是小松のり大と改め

祿といつ病と同は四足是并じ川魚又海魚の内海鯨鯊と令せは最

房事と林とさそそ甚と嚴重に信し十月の御神夏と勤む此間熱田女

とつる老女つて頭人女抱れとて右段人當所小松の庄苗田榎并四

条五條木此村小敷代相續く其家系の者ありて是と勤む十月十日神樂

を振奉るこ他の神夏とかり御霊なりといふ言もろく神樂堂よりかれ出せ

し中観音堂とて面わらまわ是と行臺よりつて夫より觀音堂小

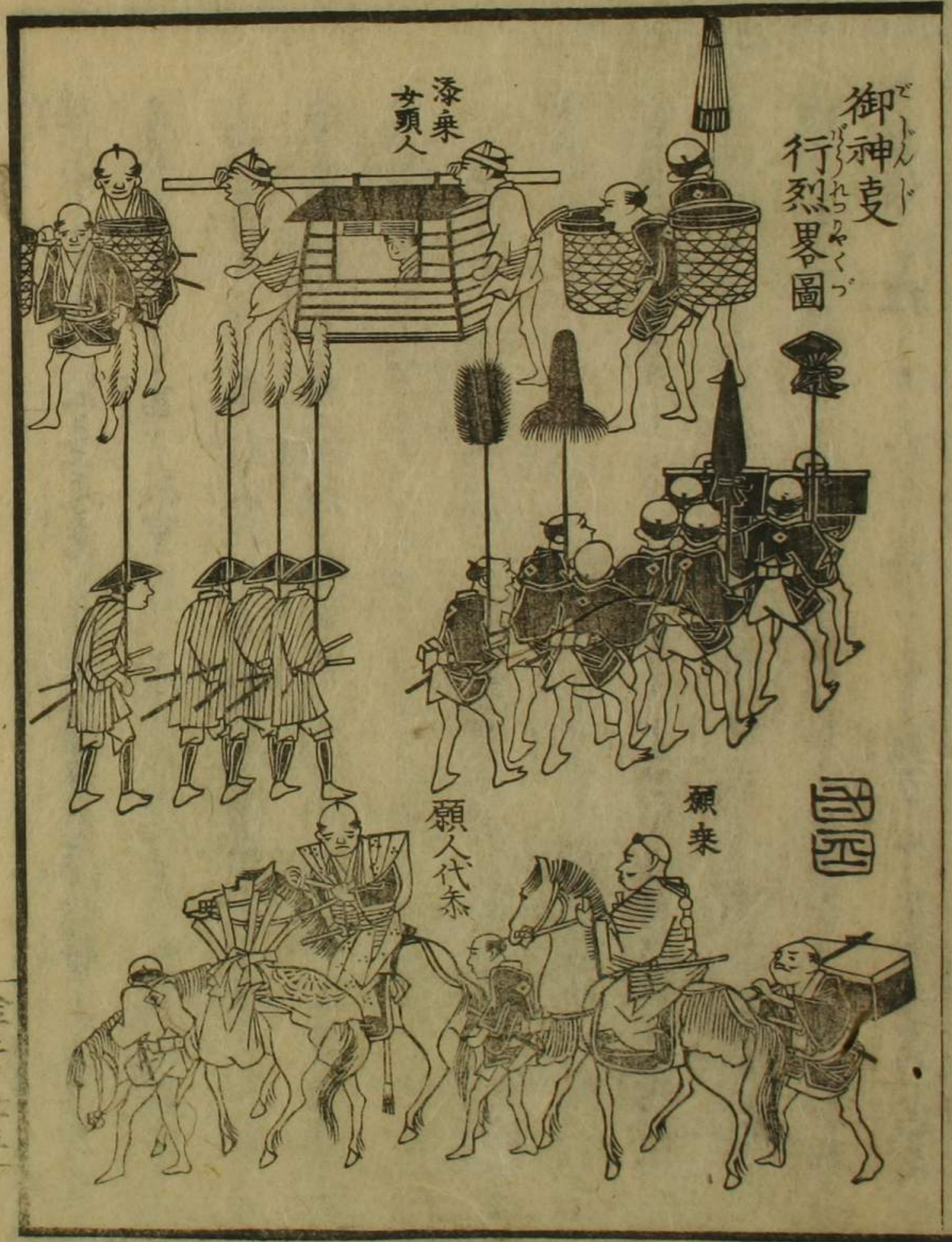
神樂とす神役小つて西頭人の家の僧此と人との實は木もて照らす

の式つて後此照具とてい堂の縁より庭へもすて著は蓮池とて

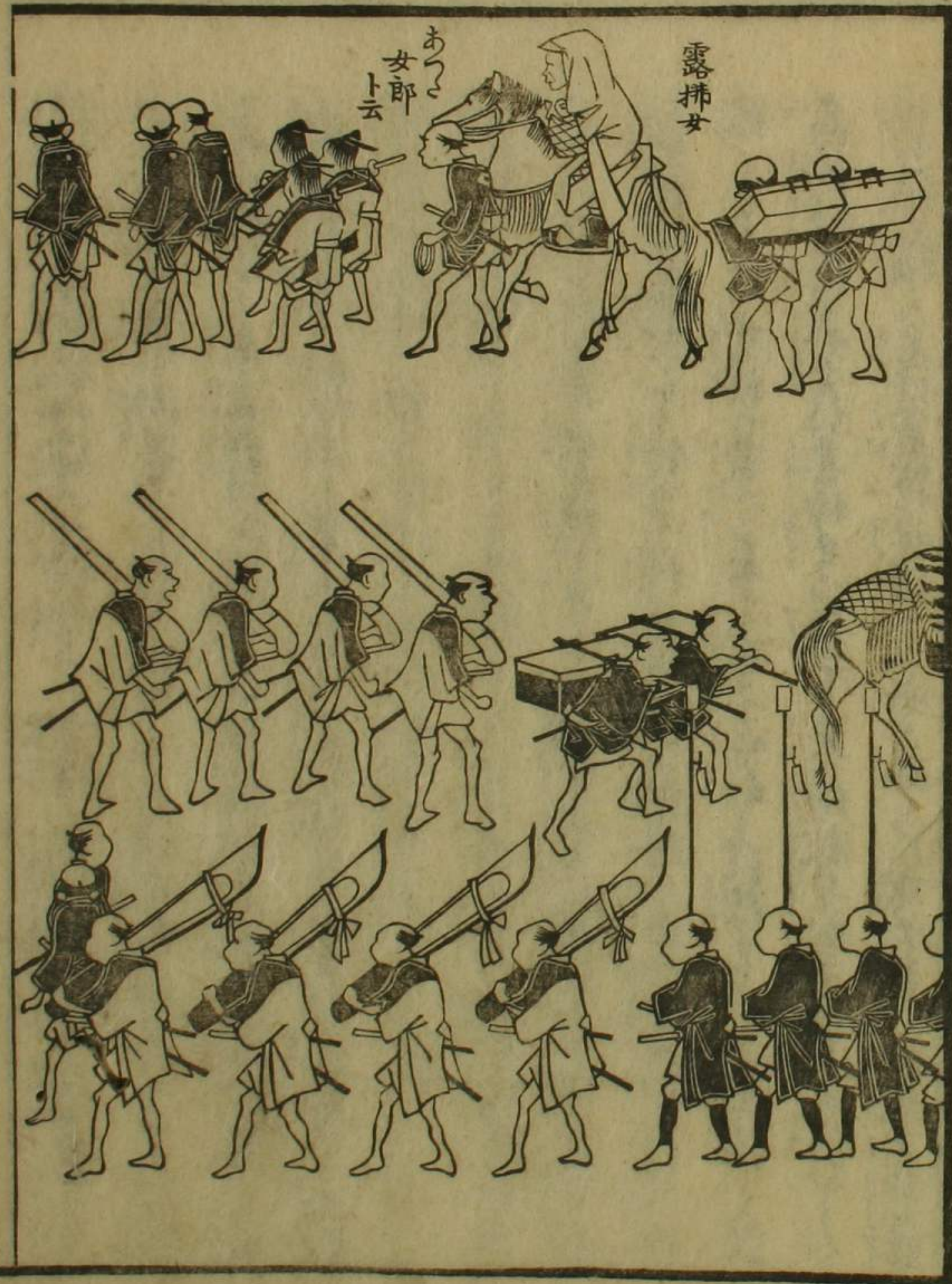
是神夏を終る御神事終る諸人皆下山して参詣人の御神年中乃

僧俗とも小廿夜一人も登らせ又此著とひく幸後つてとて草朝志

く参詣して標しむれも捨らや照具かしもや著は其夜に



全二、三



金二ノ元四

阿州の著金谷寺護神の運び給ふ言傳ふ則申の寺院著倉寺
より例年の通り御著るもびも有之の使者来る此夏いつら神傳
るや往古より毎年斯のじに實に奇妙の御神夏有難に夏どもう當
山小嶺と夏を制むるに年中只此一夜限き其余の夏夜も亦治
間断り佐作の軍八蟹川魚海嶺蒜ふと林を食ともいふ
夫當山と象頭山と号する夏遠望より山の形勢象の政のわらうゆに
名を寺と松尾寺金光院と号し佛塔寶篋輪與らう守國中乃
壯觀遐述の企望とる所らう作権現此小鎮座の年代定らるる只神
代より其初め幾千載と言ふことわら然もども金毘羅といふ
名佛經小出所され其神号と縁する夏佛教皇朝小治まの後の
和國は神名帳に見ゆ金毘羅林結とて此は孔といひ或は若色と翻し金光院と勝

金二ノ戒五

王經此神名より最勝王經流布の國と守護一説法者と擁護一給んの本誓
又二説小天竺象が山金毘羅神の居所なりト又曰釈尊出世の時佛法と守護の
為らて天竺に出現し給ふ則ち修羅所謂者閻嶺山の金毘羅神是ら釈
尊へ渡の法舍利とて此地へ渡り給ふト又説く輪明神清泚権現新羅明神同
神の異名あり或は素盞鳴尊とて之に國流轉して佛法と守護し給ふ震
且武塔天神午頭天王と号し天竺にて摩訶羅神といふ雲石河闍利自我
岡大物主命天竺ふゆとて彼土より金毘羅といひしとて傳教大師神
域に通し金毘羅輪一躰と釈し給ふとら經の中演ぶる釈尊に授
婆大盤石を授時神手といふ石とて修羅神なり即祇園精舍に
鎮守し給ふものなりト尚権現の靈驗奇怪の夏言縁の乃所あり
権現の御真躰本社の上の方巖窟あり其中より

宮武の

御崇敬むらう厚く 御朱印地二百餘石河く 眞蹟奉幣とがくかば実
 に日本一社の靈神あり一統小寺と金光院といふ夏は昔聖武天皇天平十二年
 二月の紹小天下の緒州四天王の像と安ト金光明最勝王經と寫して州に納
 め毎月八日最勝王經と續續せしめり齊日小殺生と禁ト僧寺と金光明四天
 王護國之寺と号しんは是佛法王法とも天地と永久のんを祈りぬ
 故う疑ふらへ其時の寺号は略せん云此山峰高く谷深く毒水雲水絶
 勝して四時の風景美觀あり十二景八景おれ待歌へ前小著凡

二月内の牙とれ出はやく
 無村
 月居
 寄倒
 谷嶺

金二ノ卅六

金毘羅より諸方道法

北東の方

善通寺 凡五里半 祢谷 凡五里余
 多度津 凡二里 白浮 凡二里
 丸龜 凡二里 鶴足津 凡四里
 白峰 凡六里 佛生山 凡五里半
 高松 凡八里 志度 凡十里
 八嶋 凡九里 八栗 凡十里
 西南の方
 観音寺 凡五里 仁尾浦 凡五里
 小松尾寺 凡七里 雲辺寺 凡十里
 植田乃松 凡五里

かすむ是るよ移る
 豆水陸
 一行



金毘羅齋齋悉く終つて善通寺に齋請せん欲ふ小鞆橋の西詰を
 北へ往るは是より行程一里半あり
 興泉寺 往還より遙く東に見ゆ近世八景の内小加

八景之内 貞泉寺鳴鐘

梅村

興入林鬱蒼邑閑羣鴉爭宿各飛還蒲葦聲吼興泉寺錫杖僧歸松尾山
 阿比比まゝの我々小者すむらびつとけ寺にあらはれ 一 執

大麻神社

祭神一座 天太王命 延喜式神名帳ニ出度郡二座之内也

三代實錄ニ云貞觀六年十月讚岐國授大麻神從五位上
 榑盤開戸尊 豐盤開戸尊 隨身門の左右に祭る

此二神の傳はてしなく通例の形勢に異なり是れ其の古形に於ては
 高麗物一対同河にあり是れ古作の遺蹟なり其の古形は
 のりあり一々當國に此彼の遺蹟をみ及べり

金二ノ元七

大麻神社

千首 大ぬさ

あつてま
 まいり
 んせ



大麻神社隨身門 古作兩神之像

長凡四尺許

今世一音彫刻する隨身の形像ハ禁中近衛の次將の

帝王と祭り
官家の神靈也。

神社ハ然るべし然れ
神代の尊と鎮座一

奉る神社小おのり
儀盤間戸豊盤間戸と

崇め申ハ當社の神像の
尊く思ひ



らりしは今世の地のももてあつたゆへ

金二ノ八

五岳山誕生院善通寺

善通寺村あり四圍遍れ七十五番の札所あり

本尊 薬師瑠璃光如来

私法大師作座像長一丈六尺金堂ニ安置

五重大塔

金堂の南あり先年焼亡 鐘樓 大塔の右あり 鼓樓 大塔の左あり

常行堂

鼓樓の東あり 觀喜天祠 鼓樓の南あり 五社明神社 大塔の右の南あり

天神社

金堂の南あり 經藏 金堂の右あり 善女龍王社 金堂の後池の中あり

南大門

金堂の正南あり 法然聖人塔 南大門の内車傍あり 足利尊氏郷塔 法然聖人の塔あり

楠大樹

南大門の内西の傍小二本あり 實一希代の大樹あり

觀智院

金堂の前大師堂より道條の左あり 花成坊 同左の傍あり

院主坊

當山の坊中より寺内觀音堂あり 花成坊あり 寺中小薬師堂あり

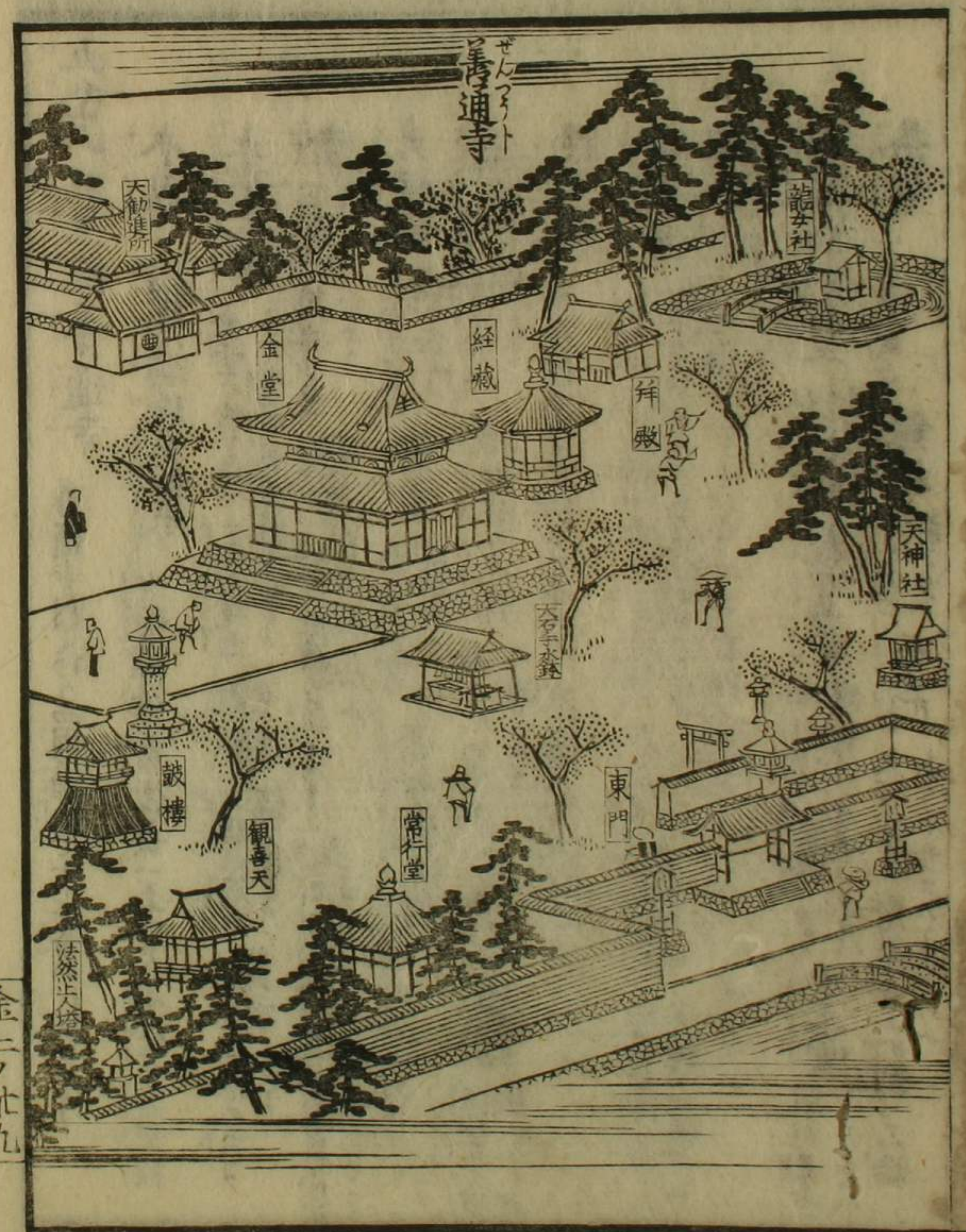
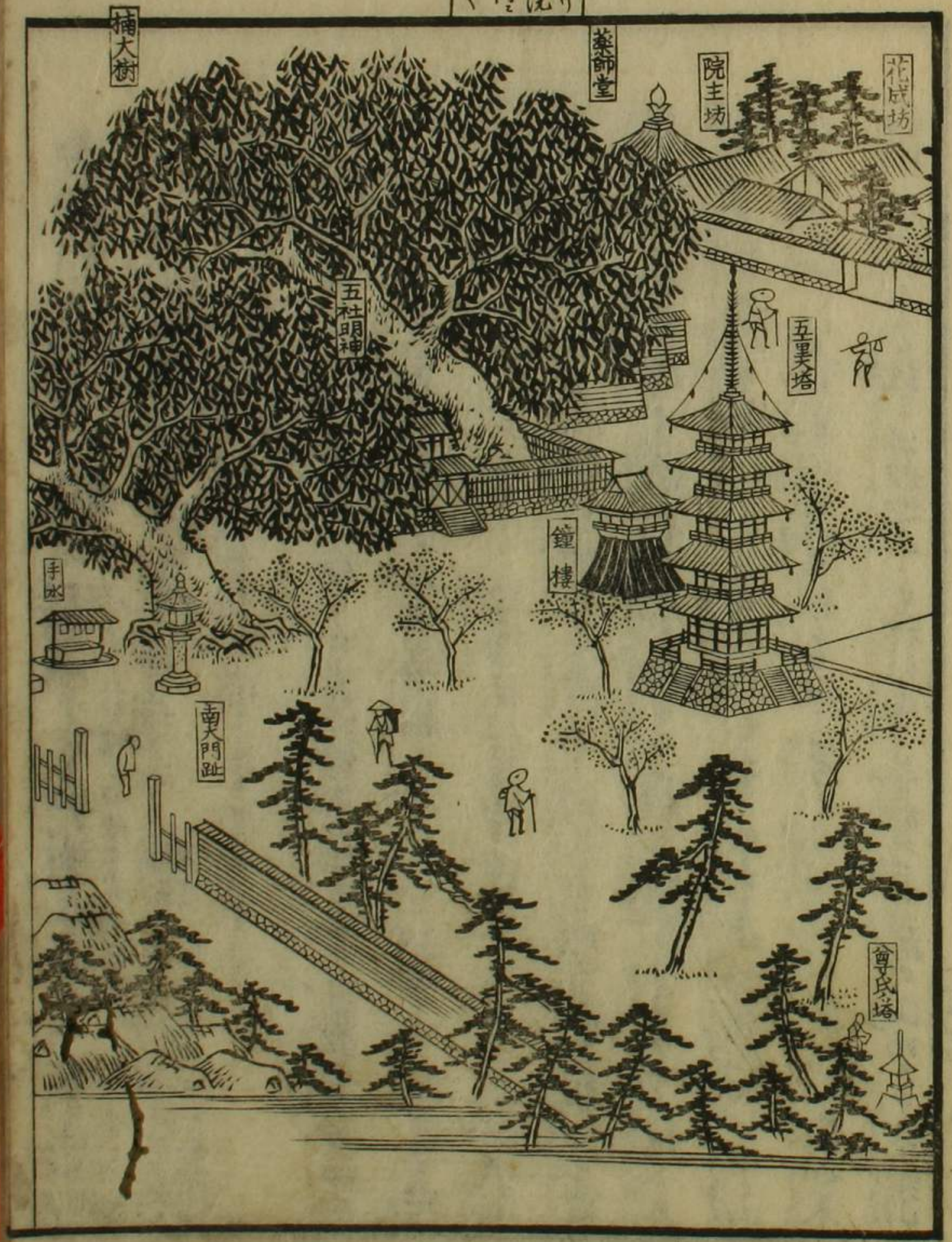
眞院御影堂

私法大師御影堂の左の傍あり 十王堂 同左並ふ

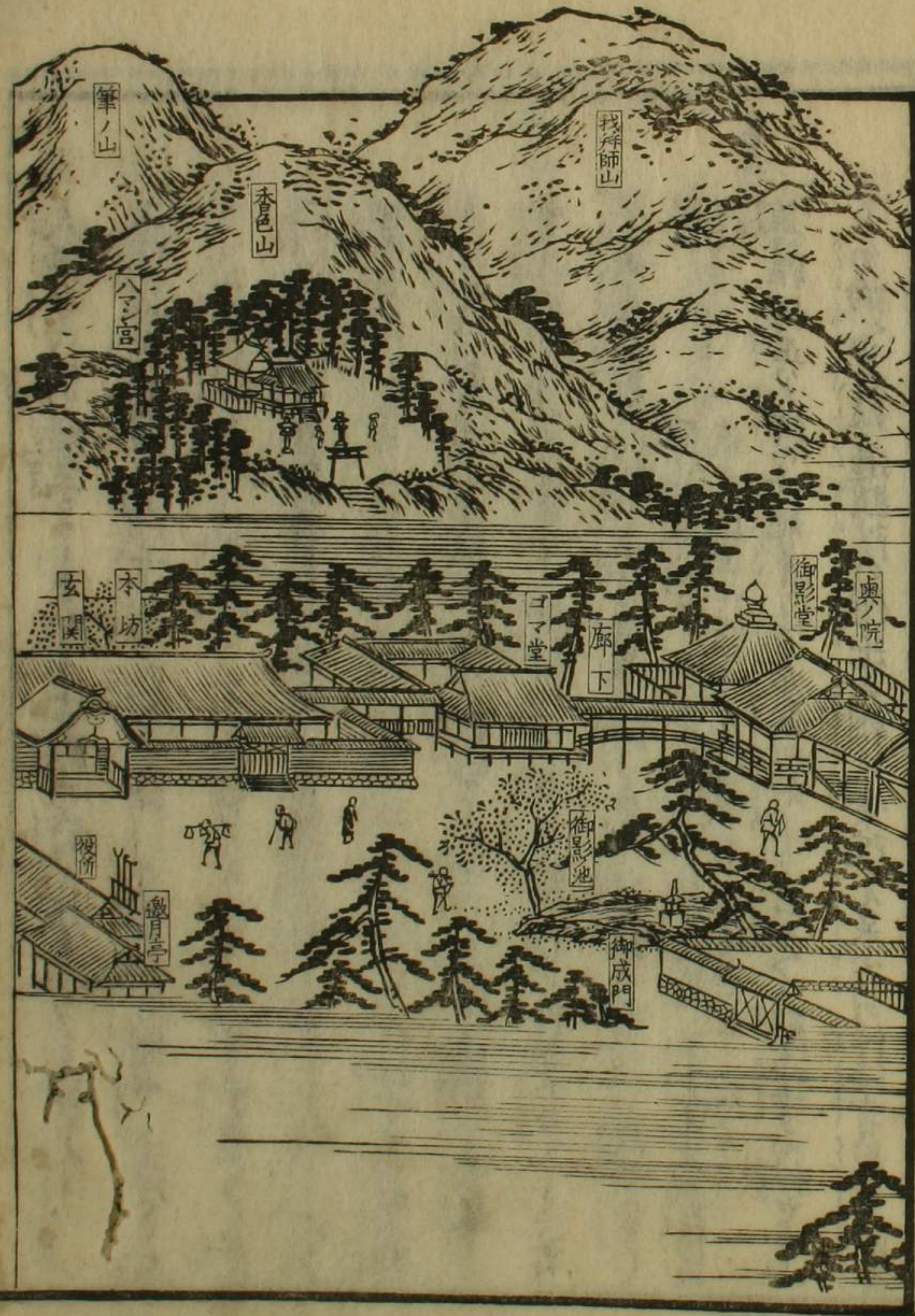
茶堂

十王堂並ふ 鐘樓 十王堂の南あり 二王門 大師堂の正面東より門外に石橋あり

是より
奥の院
三門



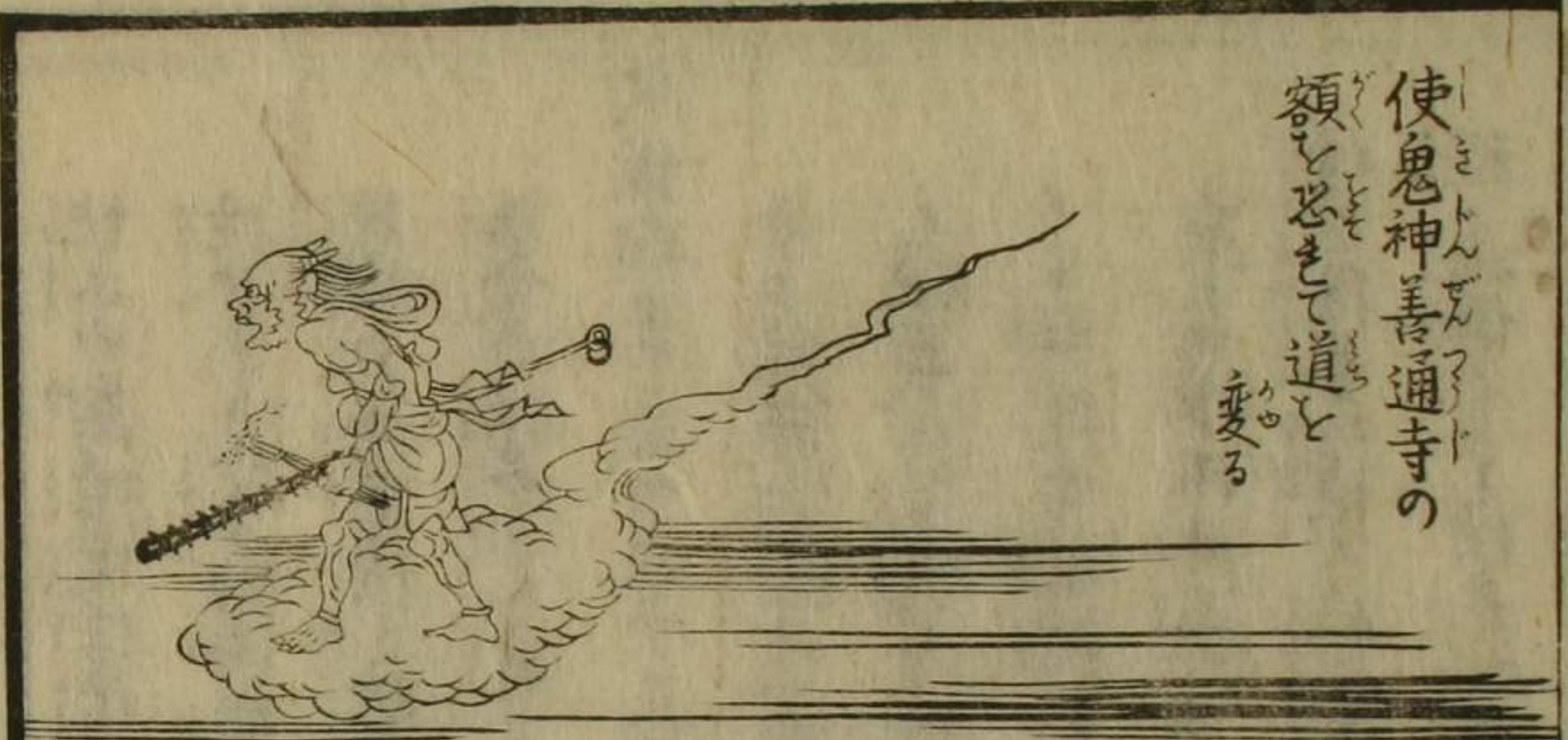
金二ノ九



大師堂の誕生すませし古蹟の所は作まらざり
 又西の紀は大師の御年ふもちし海も四の門の額ありこれ大師
 の遠く侍りて末の世に如何なる人ぞんぞ東より
 侍りて有道公範の時ぞ二牧ありて善通之寺と書せられしなり
 此道範阿闍梨といふ高僧が住され大徳より治四年の春不慮
 る不慮の難とあま多ありて此國に配流せられ幸ひ大師の遺跡と慕敬して
 寛元二年九月より當寺に移住ありて此寺を製作の書籍木書しと書
 了兼元の始は法然上人も此國に流さる時大師の遺蹟と拜せん古
 悦むれりとも西の土人行脚のてに安の年法然上人配流兼元元年其後道範上人配流に治四年九此同年曆七十有餘年及なり
 靈場記曰
 真雅僧兵大師の御胞弟より原東此所より出あり故に此寺に住せり
 勿論其後遍照院の僧正實朝延命院元泉小師の仁海宥範有源有

快木の高德達住居せりト云
 往昔より宮武の御崇敬代は後々々倫上院宣二十余通項戴一且
 將軍家御寄附之状も數多ありむ莊田多ありて禪講の精衆林をば
 勅會の法事も有し阿含尚靈宝什物品目八夏繁りまは累之
 東鑑安貞二年戊子三月十二日之條
 今日被停止讚岐國善通寺領之地頭職畢是弘法大師御誕生
 之地長日不退御祈禱之砌也本佛則大師御自作釈迦藥師像
 云云而近年被補地頭於彼領之間寺用罔如之旨依捧歎状殊
 有甚沙汰被止之云云
 傳云往昔陰陽の博士安部清明吉の縁ありて當國に下向時夜道にゆ
 程に相俱しして使鬼神火と燈しるる善通寺の前とすく時火と打消て

使鬼神善通寺の
額と必きて道と
変る



金二ノ四十三

往方と云ふは然る寺と過く後出来まじり清明のうらみ其故と問ふ使鬼
神ありて此寺の額曰天守護一給ふ故と必きて道と変る言
一もろくど是る人所謂大師自筆と書せ給ひ額あり
抑弘法大師當身度郡原風浦依伯の直田か子あり母八河刀の仕官か女
夢に梵僧懐小へと見てとるら姓十二ヶ月を経て光仁帝寶龜五年六月
望日を生まゆ小名と貴物と号く類故甚と世に異して神童と稱し初ふ
して六經史傳に通下石剗寺の沙門勤操と從て虚空藏求同持の法と授
くる是刹髪は夜の髪とも成る前より二十歳して勤操と就て落髪し
沙門の十戒を受け之論と委く研究は法名と教海と稱し後自ら改め
て如堂と号し其後延暦十四年東大寺の戒壇に登りて且是戒を受け又
空海と更む同廿二年夏末法の為に遣唐使に随つて入唐し給ふ被上り

て徳宗皇帝貞元廿年より青龍寺の慧果阿闍梨一觀の慧果の曰く汝
此に來りて何を晚きや我相待りて己久しと命してより西都の秘具を以
て法器を授け雷尊をさすこと奉りて飯朝の時二年二十二年唐土元和元
年和朝とて大同元丙戌年より帝と姑らて御殿上人とて空海と尊しめよ
時二論の名迹とて道昌唯識の碩學とて源仁華嚴と誓ある道雄天台
小隱とて圓澄おども争ひの旗を捲き降泰りしとて弘仁七年紀州高
野山に金剛峯寺とて草創し同十一年帝宸翰とて傳燈大法師位の記と
賜ふ同十四年東寺と賜て灌頂院と建らる天長元年天下大旱以空
海勅と奉りて神泉苑に積雨の法と修し勿地と應驗あり同二年
高雄山と賜る養和二年二月廿一日年六十二歳とて高野山に入定
給ふ其後必喜二十二年冬十月弘法大師と謚と賜る

往古此地へ海より前より五峯屏風のごとく海上よりつらつらと
風が涌き上りて今に圓陸地となりて其形とて今も名を残り
とありて言傳るなり

鎮守八幡宮 後の山あり倣い佐伯の八幡宮より大師の兩親と祭りの入所とを

獨鉦水 後の山の林下小つらつら水の井ありとてども水つらつて清潔なり

御手洗水 十丁をり山の方より山ありのどより湧出たり

土俗曰往古大師當寺の本尊と作すの當山の土を以て此水と和作し給
ふとて故に始土佛ありとて後より作すわくせのありとて今も此水靈驗あり
て諸病を治すとて速くありかきゆへ人あやまつて治すたはせあり甚しとて

八十八箇所之石佛 香色山の山中より四圍靈場の本尊と石像と造りて所

西護荒神祠 右同山中より西方守護の荒神と観音

南護荒神祠

南大門の南西の傍より南方の守護あり

東護荒神祠

東門の外石橋の傍より東方の守護あり

北護荒神祠

在中の北より北方守護の荒神あり

六地藏堂

東門の東丸龜街道の傍に南例より

金毘羅泰請所因會卷之二畢

